

○旧開智学校校舎の概要

- 【文化財種別】 建造物
【名称】 旧開智学校校舎
【員数】 一棟
【構造及び形式】 木造、建築面積五一三．五八平方メートル
二階建、寄棟造、棧瓦葺、中央部八角塔屋附 建築関係資料（文書56点、図面7枚）
【所有者】 松本市
【所有者住所】 ながのけんまつもとしまるのうち長野県松本市丸の内三番七号
【所在地】 かいち長野県松本市開智二丁目四番一二号
【指定理由】 国宝指定基準



「重要文化財のうち極めて優秀で、かつ、文化史的意義の特に深いもの」による。

【来歴・特徴】

旧開智学校校舎は、明治9年（1876）に松本市街地を流れる女鳥羽川沿いに建てられ、小学校校舎として90年近く使用された後、昭和38年（1963）に新校舎が建築されたことで現役の校舎としての役目を終えました。歴代の教員や児童、市民によって大切にされてきた校舎は、昭和24年に現存部分のみ重要美術品に認定され、同36年に重要文化財に指定されました。昭和38年から39年にかけて、松本市立開智小学校の新校舎の隣（現在地）に移築復元され、同40年から博物館施設として公開保存しています。同年、旧開智学校校舎を設計施工した大工棟梁立石清重たていしせいじゅうが遺した校舎建設に関する文書資料27点と図面1枚が附として指定されました。以来、明治時代の建築や教育の歴史を伝える施設として多くの方にご利用いただいています。

校舎の一番の特徴は、正面車寄の龍と天使の彫刻を中心とする独創的な意匠です。全体に、漆喰大壁や唐破風など伝統的な技法とガラスやペンキといった西洋伝来の部材、石積みを模した鼠漆喰塗をはじめとする洋風に見立てる技術が混ざりあい、高い独創性を有した意匠の校舎となっています。中廊下によって動線確保がなされた内部には、1室ごとに区切られ広い教室や教員控所、生徒控所、講堂（試験所）といった諸室が並び、学制によって示された理想的な教育環境が実現されています。日当たりをはじめとして子どもたちの教育環境を第一に考えて配された諸室は、同時代の全国の校舎と比べても非常に先駆的な平面計画となっています。

また、近年調査が進んだ立石家伝来の文書・図面資料から、校舎の設計過程や当時の建築事情などが明らかとなりました。旧開智学校校舎で保存してきた各種の資料と合わせ、地方における擬洋風建築の様相を詳細に示す点も高い評価を得ています。立石家伝来の文書・図面資料の内、旧開智学校校舎建築にかかわる文書29点と図面資料6枚が附資料として追加指定を受けることとなりました。

旧開智学校校舎は、全国で文明開化の進展した当時、外国からの西洋建築受容の様子を示す擬洋風建築を代表するとともに、近代教育の黎明を象徴する学校建築として、深い文化史的意義を有していると評価されています。